

スマトラ島沖地震 (2004年)

出典: フリー百科事典『ウィキペディア(Wikipedia)』

スマトラ島沖地震 > スマトラ島沖地震 (2004年)

2004年スマトラ島沖地震(スマトラとうおきじしん)は、2004年12月26日、インドネシア西部時間07時58分53秒(UTC00時58分)にインドネシア西部、スマトラ島北西沖のインド洋で発生したマグニチュード9.1^[1]の地震である。単に「スマトラ島沖地震」といった場合、この地震を指すことが多い。

目次

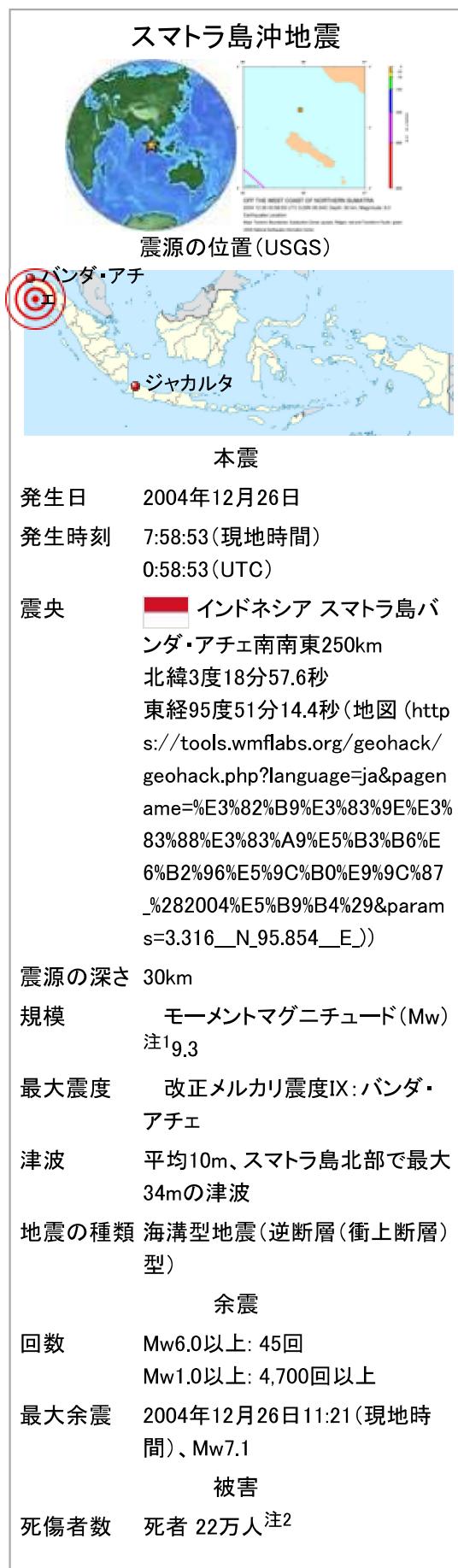
- 1 解説
 - 1.1 各機関の解析によるマグニチュード
 - 1.2 地震の発生間隔
 - 1.2.1 地層の発掘調査による
 - 1.2.2 歴史文学による
 - 1.2.3 考古学的な調査による
 - 1.3 前兆的変化
- 2 地震の概要
- 3 津波
- 4 地球への影響
- 5 各国の被害状況
 - 5.1 インドネシア
 - 5.2 インド
 - 5.3 スリランカ
 - 5.4 タイ王国
 - 5.5 ミャンマー(ビルマ)
 - 5.6 マレーシア
 - 5.7 モルディブ
 - 5.8 その他の国
 - 5.9 観光客などの外国人
- 6 救援・復興支援の状況
 - 6.1 各国政府・民間団体等による主な支援一覧
 - 6.2 緊急に必要とされる支援
- 7 脚注
- 8 関連項目
- 9 外部リンク

解説

この2004年スマトラ地震におけるマグニチュード9.1は、1900年以降でチリ地震に次いで2番目に大きい規模である。これはモーメントマグニチュード(Mw)であり、ハイチ地震(Mw7.0)の約1,400倍、2003年十勝沖地震(Mw8.0)の約40倍、東北地方太平洋沖地震(Mw9.0)の約1.4倍に相当するエネルギーである。

また、アメリカ地質調査所(USGS)の暫定発表で当初マグニチュード8.1と発表されていたが、次にマグニチュード8.5、さらにマグニチュード8.9と発表された後、9.0に修正された。さらにその後、アメリカ・ノースウェスタン大学などの研究グループにより、9.3に再修正された。

2012年現在、USGSではマグニチュード9.1としている^[1]。最終的には米ノースウェスタン大学と同程度の値になる可能性もある。これは、震源地でプレートが3回に渡って南から順にずれ、そのずれの継続時間が6~7分にわたったためと見られている。



震源域は研究機関によって異なり、およそ1,000km – 1,600kmと長さをもつ。地震後のGPSや実地調査では、スマトラ島北西沖にあるニアス島からインド領のアンダマン諸島北端までの広範囲で隆起・沈降・水平移動といった地面のずれ(変位)が観測されている。国土地理院の分析によれば、震源域はミャンマー領ココ諸島とアンダマン諸島北端の間付近から、ニアス島の北西に位置するシムルー島北部までの約1320kmとされている^[2]。

平均を取って約1,300kmだとしても、日本列島沿岸の海溝に当てはめれば銚子沖から得撫島南方沖あたり、あるいは銚子沖から奄美大島東方沖あたりにまで及ぶ規模である。M9.3の本震だけを見ても、ずれた断層(プレートの境界面)は南北に約400km、東西に約150kmにわたる範囲に及び、ずれた距離(変位)は最大約20mという巨大な規模のものであった。

大津波が発生し、インドネシアのみならず、印度洋沿岸のインド、スリランカ、タイ王国、マレーシア、モルディブ、マダガスカル、ソマリアなど東南アジア全域に加え、東アフリカ等でも被害が発生した。本地震ののち、チリで津波デマによるパニックが起こり1人が死亡したほか、世界各地で新たな地震発生後に津波を警戒して住民が早期に避難した事などから、この地震が世界中に知れ渡り、人々の心に強く残ったことを示している。

この地震以降、スマトラ島周辺では大きな地震が多発している(詳細は「スマトラ島沖地震」参照)。

各機関の解析によるマグニチュード

地球シミュレータによる計算結果よりMw=9.1^[3]、埋込式体積ひずみ観測結果よりMw=9.1~9.2^[4]、深部ボアホールひずみ観測結果よりMw=9.2、地球の自由振動の観測結果よりMw=9.1 – 9.3の値が算出されている。

地震の発生間隔

過去数千年で複数回の、大規模な津波の発生の痕跡が発見されている。

地層の発掘調査による

2008年、日本の産業技術総合研究所とアメリカの地質調査所、豪州地質調査所、ワシントン大学、タイのチュラロンコン大学などにより組織された共同調査隊は、タイ王国南部の印度洋沿岸で地質調査を行い、過去約2500年間の地層中から4層の津波による地層を発見した。この調査結果から、2004年と同様の大津波は数百年に1回発生していて、それぞれ550 – 700年前頃、2200 – 2400年前頃と推定されている。^[5]。

歴史文学による

900年に、印度南部のベンガル湾に面したタミル・ナードゥ州に印度洋からの大津波が襲来し、修道院・寺院にいる数百人の人々が犠牲になったという記録が、同州の図書館に残っている。また、印度のジャーナリストであるKalki Krishnamurthyの小説「Ponniyin Selvan(犠牲の頂点)」にも同様の記述がある^{[6][7]}。

考古学的な調査による

印度の研究者は、印度の東海岸に位置する7 – 12世紀の考古学遺跡から発見された津波堆積物が900年頃に大津波があったことを示していて、2004年と同規模の超巨大地震は周期性があると推測している^[8]。同調査によれば、印度東岸に被害をもたらした印度洋からの大津波は、過去2000年間で900年頃と2004年のものが判明している。

前兆的変化

統計数理研究所の解析によれば、スマトラ・アンダマン地域での1973年以降の地震を調査したところ、2000年7月(M9.1の約4年半前)から同地域の地震活動が活発化していた。しかし、日本の東北地方太平洋沖地震の例では静穏化傾向が示されているが、何故『活発化』で有ったのかは不明である^[9]。

負傷者	13万人 ^[2]
被害額	9億7,700万ドル(必要とされる緊急支援額) ^[3]
被害地域	スマトラ島を中心とするインドネシア、およびマレーシア、タイ、ミャンマー、インド、スリランカ、モルディブ、ソマリアなど

注1: ノースウェスタン大学の調査による。USGSは9.1としている。

注2: 2005年6月現在、ロイターおよびWHOによる。

注3: 国連による。

出典: 特に注記がない場合はUSGSによる。

プロジェクト: 地球科学、プロジェクト: 災害

地震の概要

スマトラ島の西方約160km、深さ10kmで発生した地震はマグニチュード9.3の巨大なもので、1960年に発生したチリ地震のマグニチュード9.5に次ぐ超巨大地震であった。震源はスンダ海溝に位置し、インド・オーストラリアプレートがユーラシアプレートの下に沈み込むことによる海溝型地震の多発地帯の中にあった。これにより、ビルマ・マイクロプレートの歪みが一気に開放された。



この地震の破壊開始点は震源域の南端にあたる北緯3.298度、東経95.779度付近で、海洋研究開発機構らの解析にれば、大きく分けて3段階で進行したことが分かった^[10]。第一段階は、南側のスマトラ島沖(スマトラセグメント)が断層長さ420km * 幅240km(平均5 – 20mのずれ量)、次いで中央部の(ニコバルセグメント)が断層長さ320km * 幅170km(同5m)、さらに北側(アンダマンセグメント)が断層長さ570km * 幅160km(同2m以下)ずれた。全体として長さ1,200 – 1,300kmの震源域であり余震域にほぼ一致する。

断層のずれは逆断層型で、断層面が平行に近い衝上断層と見られている。地震発生時、沈み込むインド・オーストラリアプレートに対して、上にあるユーラシアプレートの海溝に近い西側の帶域が隆起、海溝から少し離れた東側の帶域が沈降したことによって、震源域より西側のスリランカやアフリカなどでは初めに押し波、東側のタイなどでは初めに引き波が押し寄せたと考えられている^[11]。

この隆起や沈降は、現地調査やGPS観測によるもので、地震の際に大きく変動を起こした上、震源域より北の地域でも数ヶ月間に渡り地殻の変動が続き、橋本学・京都大学大学院教授によるとモーメントマグニチュードの換算でMw8.8 – Mw9.0と見積もられるという^[1] (<http://www.jgu.org/publication/cd-rom/2006cd-rom/pdf/S208/S208-013.pdf>) (PDF) (余効変動)。

アンダマン諸島北西のノースリーフで約1.3mの隆起、南東のポートブレアで約0.95mの沈降を観測するなどし、海岸線が移動して、隆起した地域ではサンゴが死滅するなどした^[12]。

- 安藤雅孝・名古屋大学環境学研究科附属地震火山・防災研究センター長によると、ビルマプレートに対するインドプレートの沈み込み速度が年間2センチ程度で今回のすべり量が30mであることから、同様のM9クラスの超巨大地震の歪蓄積にはおよそ1000年前後必要だと報告している(日本応用地質学会 平成17年度研究発表会)。

地震動(地震の揺れ)は震源の南端では3分ほど、インドネシアのバンダ・アチェなど少し離れたところでは6 – 7分続いた。バンダ・アチェの揺れは、気象庁震度階級では震度5強から6弱程度の強い揺れで、しかもその揺れが6 – 7分も続いたことで、住民に強い恐怖感を与えた。

遠いところではバングラデシュ、インド、スリランカ、マレーシア、ミャンマー、シンガポール、タイ、モルディブまで伝わったほか、日本では防災科学技術研究所の広帯域地震観測網(F-net)で表面波(レイリー波の鉛直成分)のうち周期200~330秒の超長周期地震動として観測された。北海道大学によると秒速約4km、14400km/h(空気中のマッハ11前後に相当)で地球を少なくとも5周(約3時間で地球を一周)しており、13周した可能性もあるとみられている^[13]。

- 長さ1,200 – 1,300kmに及ぶ震源域で余震が発生しており、本震発生後24時間以内にマグニチュード5以上の余震が26回、(ベンガル湾東端のアンダマン諸島付近で13回(最大6.3)、ニコバル諸島付近で5回(最大7.3)、スマトラ島北部西方沖で6回(最大6.2)、スマトラ島北部で2回(最大6.0))発生した他、2005年1月17日までにMs6.0以上の余震が16回に達するなど、規模が大きい余震の回数が非常に多かった。
- 12月28日、アメリカ合衆国地質調査所は、この地震によってプレートが最大で約30mもずれ、ニコバル諸島等が地図の書き換えが必要なほど移動した、という観測結果を発表した。1月4日には訂正し、地表面が1 – 2m以内で移動したに留まるという試算結果を発表した。

以下の表は、アメリカ合衆国地質調査所 (USGS) が観測した本震と以後の余震の一部である(資料元: USGS (http://earthquake.usgs.gov/recenteqsw/Quakes/quakes_big.html))。

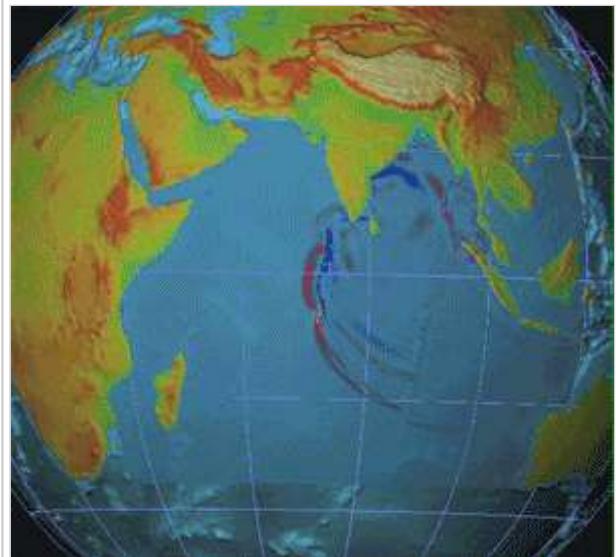
マグニチュード	日時 (年/月/日)	協定世界時 (時:分:秒)	北緯 (度)	東経 (度)	震源の深さ (km)	震源
9.1(または9.3)	2004/12/26	00:58:53	3.316	95.854	30.0	スマトラ島北部西岸海上
5.9	2004/12/26	01:48:47	5.393	94.423	10.0	インドネシア、スマトラ島北部
5.8	2004/12/26	02:15:58	12.375	92.509	10.0	インド、アンダマン諸島
6.0	2004/12/26	02:22:02	8.838	92.532	10.0	インド、ニコバル諸島
5.8	2004/12/26	02:34:50	4.104	94.184	10.0	スマトラ島北部西岸海上
5.8	2004/12/26	02:36:06	12.139	93.011	10.0	インド、アンダマン諸島
6.0	2004/12/26	02:51:59	12.511	92.592	10.0	インド、アンダマン諸島
5.9	2004/12/26	02:59:12	3.177	94.259	10.0	スマトラ島北部西岸海上
6.1	2004/12/26	03:08:42	13.808	92.974	10.0	インド、アンダマン諸島
7.1	2004/12/26	04:21:29	6.885	92.938	39.7	インド、ニコバル諸島
5.7	2004/12/26	06:21:58	10.623	92.323	10.0	インド、アンダマン諸島
5.7	2004/12/26	07:07:10	10.336	93.756	10.0	インド、アンダマン諸島
5.8	2004/12/26	07:38:25	13.119	93.051	10.0	インド、アンダマン諸島
6.6	2004/12/26	09:19:59	8.874	92.368	6.4	インド、ニコバル諸島
5.5	2004/12/26	10:18:13	8.950	93.730	10.0	インド、ニコバル諸島
6.2	2004/12/26	10:19:30	13.455	92.791	10.0	インド、アンダマン諸島
6.3	2004/12/26	11:05:01	13.542	92.877	10.0	インド、アンダマン諸島

津波

平均で高さ10mに達する津波が数回、インド洋沿岸に押し寄せた(地形によっては34mに達した場所もあった)。アンダマン・ニコバル諸島近海からスマトラ島北西部近海にかけてのおよそ1,500kmの帯状の地域(上のアニメーション参照)の、およそ海底4,000mの場所で津波が発生、津波発生時には2~3mほど海底が持ち上がり、ジェット機並みのスピード(約700km/h)で津波が押し寄せたと見られる。前述の速さで波が押し寄せたスリランカ、インド、モルディブ、アフリカ諸国などに対して、震源の東側となったタイ、マレーシア、インドネシア、ミャンマーなどでは、比較的遅いスピードで津波が押し寄せた。特に、タイのプーケットに津波が到達したのは、地震発生から2時間30分後だった。これは、津波が通過したアンダマン海が、広い大陸棚が広がる浅い海で、津波が進むスピードが遅かったためである。

津波はアフリカ大陸東岸のソマリア、ケニア、タンザニアにも到達し、ソマリアで100人以上の死者が発生。ケニアのモンバサでは避難命令が出された。また南極大陸の昭和基地でも半日後に73cmの津波を観測した。また、アメリカ合衆国の西海岸、南アメリカ大陸でも数十cmの津波を記録した。

インド洋の各国では太平洋側の各国にて整備されている津波警報国際ネットワーク(津波早期警報システム)が無く、2時間後に到達する地域においても避難勧告を出すことができなかった。この為、多くの死者を出す一因となった。しかも太平洋津波警報センター(ハワイ)は津波発生の恐れに気づいたものの、警報を出したのはディエゴガルシア島駐留米軍宛のみで、関係各国には“告知”しか送らず、津波被災経験ゼロのインドネシアではその重大性に気づけなかつたとされている^[14]。2008年2月12日、UNESCOは、こうした観測体制の不備から国際惑星地球年の一環として、観測体制と教育体制の不備による『世界最悪の人災による悲劇』のワースト5の一つとしてスマトラ島沖地震の津波災害を認定している。



【イメージ】大津波のアニメーション(赤が海面の隆起、青が海面の沈降を表す)(NOAAによる)完全版は[こちら](#)

また、津波による被害としては、約22,000人が死亡したとされる1896年の日本での明治三陸地震、36,417人が死亡した1883年のインドネシア・クラカタウ島の噴火をはるかに超える観測史上最悪の惨事となった。

2005年1月20日の時点における死者の総数は226,566人。

また、津波の被害を受けたインド洋沿岸各国は、ほとんどが熱帯雨林が広がるところで、周囲の環境を調節し多くの生物の住処となるマングローブが減っていることが問題になっていたが、タイで、数少ないマングローブの森が津波のエネルギーを吸収し、後ろ側の陸地は大きな波に襲われずに済んだという出来事があった。この出来事を受けたタイ政府は、マングローブの保護と植樹を推進する方針を打ち出した。

地球への影響

- USGSのケン・ハドナットによると、この地震の影響で地軸の位置が約2cmずれたせいで、地球の自転に何らかの影響を与え、地球の1日の長さが100万分の2.68秒程度短くなった可能性がある^{[15][16]}。また、NASAによると同じく、地軸が7cmずれたせいで、1日の長さが100万分の2.32秒程度短くなった可能性がある^[17]。
- 地球全体の縦揺れは地震直後、約20 – 30cmあった(オーストラリア国立大学)。
- 震源から離れた日本においても地震の直後、地下水の水位の変動が40箇所以上で確認された(産業技術総合研究所)。
- M 9.3 の地震の後、2005年2月5日にフィリピン付近のセレベス海でM 7.1、同年3月28日にニアス島北部でM 8.6(スマトラ島沖地震(2005年))、2007年1月21日にスラウェシ島南東部でM 7.3 の地震が発生するなど周辺の地域で大きな地震が多発。
- M 9.3 の地震の発生から約3ヵ月半後の2005年3月12日にスマトラ島西部のタラン山が噴火、また翌3月13日にはジャワ島西部のタンクバンプラフ山が噴火するなど近隣に存在する火山の活動が活発となつた。
- 周辺各地で地殻変動を確認(位置が数センチずれた都市が多数ある事がGPS測定で判明)。

各国の被害状況

この節は更新が必要とされています。



この節の情報は長らく更新されておらず、古い情報が掲載されています。編集の際に新しい情報を記事に反映 ([https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%99%E3%83%9E%E3%83%88%E3%83%A9%E5%B3%B6%E6%B2%96%E5%9C%B0%E9%9C%87_\(2004%E5%B9%B4\)&action=edit](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%99%E3%83%9E%E3%83%88%E3%83%A9%E5%B3%B6%E6%B2%96%E5%9C%B0%E9%9C%87_(2004%E5%B9%B4)&action=edit))させてください。反映後、このタグは除去してください。(2012年4月)

インドネシアのアチェ特別州を除けば、被害はほとんどが津波によるものである。被災地の多くが地震や津波に遭ったことのない地域であったため、津波に関する警報や注意があまりなされず、人的被害を拡大させた。USGSによれば、死者・行方不明者は合計で227,898人。またインドネシアの一部やモルディブ、ニコバル諸島などでは交通・通信網が破壊されてしまったために正確な情報が入手できていない。このため犠牲者の数は今後さらに増える可能性は高い。そして、地震が発生した時期は、年末やクリスマス休暇のシーズンだったため、犠牲者には日本や欧米諸国などからの観光客も多数含まれている。最も被害が大きかったインドネシアのアチェ州では独立を求める武装勢力と国軍の対立が続いていたため、被害状況の調査や救援活動にも支障が出た。軍事政権下にあるミャンマーや長年内戦が続いてきたソマリアでも、はっきりした被害状況はわかっていない。死者83万人と記録されている華県地震(1556年)や非公式ながら死者60万人以上といわれる(公式には24万人強)唐山地震(1976年)に次ぐ、人類史上有数の震災であろう。

また被災者は500万人に達し、うち180万人に食糧援助が必要とされているほか、衛生環境の悪化から感染症や伝染病の発生などの2次災害も懸念されている。さらに一部の被災地では治安が悪化し、性的暴行事件や、誘拐と思われる子供の失踪などが多発しているという。



タイの海岸に押し寄せる津波



津波襲来前の大規模な引き波、タイ・プーケットにて



モルディブの首都マレの海岸に押し寄せる津波

スリランカ、アンダマン諸島では外界との通信が途絶状態のため、短波のアマチュア無線による非常通信が行なわれており、アマチュア無線を禁止しているインドネシア・アチェ特別州政府に対しても、支援の為に例外的に認めるよう働きかけが行なわれている。インドネシア政府はヘリコプターを使った食料投下を行いつづけているが、その食料の奪い合いで争いが生じる地域が存在している。

(以下、ロイター調べ) インドネシアは1月19日現在 (<http://www.reuters.co.jp/financeNewsArticle.jhtml;jsessionid=I GEWTJCXR52NMCRBAE0CFEY?type=worldNews&storyID=7375528>)、

[2] (<http://www.reuters.co.jp/financeNewsArticle.jhtml?type=worldNews&storyID=7343405§ion=investing>)、
その他の国は1月3日現在インド・スリランカ・タイは1月17日現在 (<http://www.reuters.co.jp/financeNewsArticle.jhtml?type=worldNews&storyID=7221128§ion=investing>) など

インドネシア

被災した各国の中で最も多くの犠牲者を出した。とりわけスマトラ島北端のアチェ特別州西海岸は甚大な被害を受け、州都バンダ・アチェや西アチエ県のムラボなどはほぼ壊滅した。現在のところ死者は131,029人、負傷者は最大で10万人、行方不明者は37,603人とされており、政府は「国家災害」を宣言した。1月19日、アチエでマラリアの発生が確認された。なおアチエではインドネシア政府との独立戦争が続いているが、アチエ人武装勢力は地震直後に停戦を宣言し、2005年8月に政府側もこれに応じた。また、震源に近かったシムルー島、ニアス島やアチエ特別州では、津波だけではなく地震の揺れによる被害も大きかった。

インド

12,407人が死亡した。また、行方不明者は1万人以上、負傷者数は不明である。アンダマン・ニコバル諸島では人口約3万人のカール・ニコバル島をはじめ、一時全島が水没した島が数十あったとの情報もある。

スリランカ

35,322人が死亡した。コロンボ発ゴール行の列車が津波に流されて転覆した。この列車は第1波の被害を免れたため、車内は安全と誤解した地元住民が多く、列車内や屋根の上に避難した後で続く第2波の津波に飲まれたため、乗客の他地元住民なども含め1,000人が死亡した。負傷者数は16,637人、行方不明者は5,637人、家を失った者は83万人それ以上だとされている。政府は国家非常事態宣言を行なった。

タイ王国

リゾート地として知られるプーケット島など、タイ南部6県のアンダマン海に面する地域(プーケット県、パンガー県、クラビー県、トラン県、サトゥーン県、ラノーン県)に大きな被害が出た。映画『ザ・ビーチ』で有名なピーピー島(ピピ島)もほぼ壊滅した。現地での死者は5,305人、怪我人は8,457人と報じられている。衛生上の理由から十分な身元確認を行わないまま埋葬された遺体も数百体あったと言われている。この震災で孤児となった子供は王室に引き取られ、養育されることになった。

アンダマン海に面する地域はリゾート地として知られており、津波の起きた地域では高級リゾート地などで多くの著名人の死亡が確認されている。ラーマ9世(ブーミポン・アドゥンラヤデート)の孫であるプム・ジェンセンも津波に巻き込まれ、遺体で発見されている。

政府は津波に対する認識が甘かったために今回の被害が生じたとして、国家気象局長を更迭し、1993年にインド洋での津波被害について警告していた元気象局長を総理府付高官として復権させた。



津波に襲われた後のスマトラ島の港町



家があったところに瓦礫が散乱している。(スリランカ)

オーストラリア人

12人が死亡、79人が行方不明。オージーフットボール選手のトロイ・ブロードブリッジも亡くなった。

日本人

日本外務省は12月26日、領事局に緊急連絡室を設置し、インドネシア、スリランカ、タイなど6か国に対して大使館などを通じて日本人の被害状況を確認した。2005年12月6日現在、日本人は40人の死亡が確認され、依然として2人の安否が確認されていない。

香港人

38人が死亡、2人が行方不明。いずれもタイにて失踪または死亡(2005/12/18現在 香港政府より)。

韓国人

12人が死亡、8人が行方不明。

北朝鮮人

3人が死亡、行方不明者なし。

救援・復興支援の状況

これまで国連やユネスコ、赤十字、WFPなどが食糧支援や医療活動を継続しているが、被災が酷かったスマトラ島北部やアンダマン・ニコバル諸島では、津波被災から2年が経過した2006年12月の時点まで具体的な復興のめどすらついていない。プーケットなどの観光産業地域は以前の半分の規模ではあるが徐々に観光客が戻りつつあり、津波の避難訓練などを行っている。そんな中、観光客が廃棄した空き瓶やペットボトル、使い古したタイヤなどを利用し、建設費用を極力抑えた廃材リサイクル住宅が被災地における復興の要として期待されている。

日本政府は12月26日、スリランカに国際緊急援助隊の医療チームの派遣を決めた。28日にはテロ対策特別措置法に基づいてインド洋に派遣されていた海上自衛隊部隊のうち任務を終えて日本に向けて帰還中だった護衛艦「きりしま」など3隻をタイ近海に派遣し、捜索・救助および遺体の収容に当たらせている。その後タイにも国際緊急援助隊が派遣され、同救助チームがピピ島で日本人行方不明者の遺体を発見するなどの活動を行った。

1月1日、小泉純一郎首相は「5億ドル(約510億円)の無償供与、津波早期警戒メカニズムを構築するための協力、自衛隊の追加派遣を検討」など最大限の支援を行うとの談話を発表した。1月4日、インドネシアのアチェ州へ海上自衛隊輸送艦「くにさき」・護衛艦「くらま」・補給艦「ときわ」の3隻、航空自衛隊の輸送機2機、陸上自衛隊第7師団など三自衛隊合わせて800～900人を派遣する事が決まり、先遣隊が現地に向かった。

アメリカ政府は12月27日に3,500万ドル(約36億円)の緊急支援を表明したが、内外から少なすぎるとの批判を受け、のちに金額を10倍に引き上げた。ほかに民間からも多額の義援金が寄せられている。また1月から3月にかけて、原子力空母「エイブラハム・リンカーン」をはじめ艦艇約20隻、航空機約60機など、総勢12,600人の米軍が各地で救援活動を行った。

国際連合は全世界に強力な支援を要請しており、1月2日までに日本を含む約40か国や世界銀行などから計20億ドル(約2050億円)の支援が発表された。

その一方で、日本政府の義援金(5億ドル)表明後に、韓国が対抗するような形で当初の義援金の額(500万ドル)から5,000万ドルへと増額するなどしたことから「金額の競争じゃない」と批判の声も挙がった。(なお、その後結局610万ドルに減額したが、そのうち支払済みは310万ドルで残額は未納である。)

またこの津波により2005年8月15日にヘルシンキにおいて自由アチエ運動とインドネシア政府の間に和平協定が結ばれ、反政府軍の兵士が一般市民へと戻りアチエ復興を目指している。

また、各国で世界中から集まったボランティアが活動しており、被災者へのカウンセリングなども行われている。

この津波によって発生した大量の腐乱遺体によりペストなどの伝染病流行が懸念されたが、現地での早急な身元確認を行わないままの土葬処分や火葬など関係者の努力により、伝染病流行での大量死は2007年1月時点、発生は報告されていない。日本でも大震災や大津波、有事などによる大量死が真夏に発生した場合の腐乱対策は整っておらず、今後の課題として残されている。



廃材リサイクル住宅が並ぶ海岸、インド・チェンナイ



被災地に派遣されて帰港した、アメリカ海軍の病院船「マーシー」

この時、アメリカ合衆国国務長官であったコリン・パウエルは、被災地の視察後「私は様々な戦場や災害現場を見てきたが、今回の災害は私の経験の中で一番ひどい」と発言し、被害の凄惨さを物語る一つとされている。

各国政府・民間団体等による主な支援一覧

2005年1月7日時点。1,000万US\$以上のもののみ。

45の国・地域及び国際機関			
総額	42億ドル		
オーストラリア	7億6,500万ドル	(=10億豪\$、5年間で)この他救助目的の海軍艦艇1隻派遣	44,458,918ドル 2007年11月06日現況
ドイツ	6億6,400万ドル	(=5億ユーロ)	126,143,320ドル 2007年11月06日現況
日本	約5億ドル	502,479,970ドル。2億5,000万ドルを即金で支払う。その他、救助目的の護衛艦2隻、補給艦1隻他自衛隊、国際緊急援助隊等派遣	502,223,784ドル 2007年11月06日現況
国際連合	5億ドル		
アメリカ合衆国	3億5,000万ドル	当初1,500万ドルと発表するも、国際世論の反発を受け増額。しかし、同年1/10には、パウエル国務長官(当時)はその額を撤回し、「6,000万ドル程度」と発表している。その他、救助目的の空母1隻含む艦艇20隻及び海兵隊派遣	132,423,926ドル 2007年11月06日現況
世界銀行	2億5,000万ドル		
ノルウェー	1億8,100万ドル		87,501,848ドル 2007年11月06日現況
カナダ	1億3,600万ドル		117,120,576ドル 2007年11月06日現況
イギリス	9,600万ドル	(=5000万英ポンド)支援物資輸送目的の海軍艦艇1隻派遣	149,234,930ドル 2007年11月06日現況
イタリア	9,500万ドル		62,939,355ドル 2007年11月06日現況
スウェーデン	7,600万ドル	(=5億スウェーデンクローナ)	46,568,314ドル 2007年11月06日現況
デンマーク	7,600万ドル		40,741,828ドル 2007年11月06日現況
スペイン	6,800万ドル		25,397,001ドル 2007年11月06日現況
中国	6,300万ドル	(=5億中国人民元)	63,598,729ドル 2007年11月06日現況
フランス	5,600万ドル	(=4400万ユーロ)	87,368,177ドル 2007年11月06日現況
中華民国(台湾)	5,025万ドル		
欧州連合	4,080万ドル	この他各加盟国独自の支援有	
オランダ	3,600万ドル		
スイス	2,380万ドル		
インド	2,300万ドル	被災国でもあるが自助可能なため被援助国から外れている。	
カタール	2,100万ドル		
ベルギー	1,640万ドル		
アイルランド	1,600万ドル		
フィンランド	1,400万ドル		
ポルトガル	1,100万ドル		
サウジアラビア	1,100万ドル	サウジアラビア国営テレビの特番の視聴者から8,600万USドル	
韓国	610万ドル	うち310万ドル未納。	
民間企業・個人など			
ファイザー	5億ドル		
コカ・コーラ	1,000万ドル	この他2,500万US\$相当の医薬品等提供	
ミハエル・シューマッハ	1,000万ドル	※F1レーサー	

緊急に必要とされる支援

2005年1月6日、国連発表による。(単位千US\$)

総額	977,000
国別	
インドネシア	372,000
スリランカ	167,000
モルディブ	66,000
ソマリア	10,000
セーシェル	9,000
国別に分類できない支援	353,000
使途別	
食糧・農業	229,000
仮設住宅など	222,000
医療	122,000
経済・インフラ復興	110,000
飲料水・衛生	61,000
その他	233,000

脚注

1. ^ a b "Magnitude 9.1 – OFF THE WEST COAST OF NORTHERN SUMATRA (<http://earthquake.usgs.gov/earthquakes/eqinthenews/2004/us2004slav/>)". USGS. 2012年2月15日閲覧。
2. ^ 衛星SAR画像分析による2004・2005年スマトラ沖地震に伴う隆起沈降域の把握 (<http://www.gsi.go.jp/common/000025588.pdf>) 飛田幹男, 今給黎哲郎, 水藤尚, 加藤敏, 林文, 村上亮, 藤原智, 『国土地理院時報』2006 No. 109, pp.21-32,
3. ^ 全地球弹性応答シミュレーション (http://www.jamstec.go.jp/esc/projects/fy2005/09_tsuboi.pdf) (PDF) 独立行政法人海洋研究開発機構
4. ^ 埋込式体積歪計の記録から推定されるスマトラ沖地震のMw (<http://web.archive.org/web/20060508202850/http://cais.gsi.go.jp/KAIHOU/kaihou74/11-06.pdf>) (PDF) 気象庁
5. ^ タイ南部沿岸の堆積物に記録された過去の巨大津波 (http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2008/pr20081030/pr20081030.html) 産業技術総合研究所 プレスリリース(2008-10-30)
6. ^ Was Nagapattinam hit by a tsunami in 900 AD? (<http://timesofindia.indiatimes.com/articleshow/978526.cms>) THE TIMES OF INDIA
7. ^ Naturer's Wrath (<http://web.archive.org/web/20120114101715/http://elt.emacmillan.com/word485/rc11.pdf>) Macmillan Publishers India Ltd., 2010
8. ^ The Spatio-temporal Context of the December 26, 2004 Aceh-Andaman Earthquake (<http://adsabs.harvard.edu/abs/2005AGUFM.U22A..03R>) ハーバード大学
9. ^ 2004年M9.1スマトラ地震に先行した地震発生率の変化について 統計数理研究所 (http://cais.gsi.go.jp/YOCHIREN/report/kaihou89/12_11.pdf) 地震予知連絡会会報 第89巻 (PDF)
10. ^ 東北地方太平洋沖地震・スマトラ島沖地震における連動型地震の考察 (<http://dx.doi.org/10.5918/jamstecr.13.17>) JAMSTEC Report of Research and Development Vol.13 (2011) P 17-33
11. ^ インド洋の地震・津波 (<http://staff.aist.go.jp/kenji.satake/Sumatra-J.html>) 産業技術総合研究所
12. ^ 2004年スマトラ島沖地震によるインド領アンダマン諸島の地殻変動 (http://www.aist.go.jp/aist_j/press_release/pr2007/pr20070126/pr20070126.html) 産業技術総合研究所
13. ^ スマトラ島沖地震: 地球を周回する地震波の検出 (<http://noreply.sci.hokudai.ac.jp/~seis/sumatra/>)
14. ^ IAC声明補足 米国は津波情報など出していない (<http://groups.yahoo.co.jp/group/TUP-Bulletin/message/467>) 論説 米国にだけ目を向ける津波報道 (<http://groups.yahoo.co.jp/group/TUP-Bulletin/message/471>) 共にT-UPブレーン
15. ^ 2004年12月29日付 読売新聞
16. ^ チリ大地震、1日が「100万分の1. 26秒」短く NASA (<http://www.cnn.co.jp/science/CNN201003020022.html>)
17. ^ Chilean Quake May Have Shortened Earth Days (<http://www.nasa.gov/topics/earth/features/earth-20100301.html>)

関連項目

- スマトラ島沖地震
 - スマトラ島沖地震 (2005年) – 震源域が重複しているため、本地震と連動性があった可能性も指摘されている。
 - スマトラ島沖地震 (2007年)
 - スマトラ島沖地震 (2009年)
 - スマトラ島沖地震 (2010年4月)
 - スマトラ島沖地震 (2010年5月)
 - スマトラ島沖地震 (2010年10月)
- 連動型地震
- 誘発地震
- 東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)
- 地震空白域
- ジャワ島中部地震

- ジャワ島南西沖地震
- メリ・ユランダ – 2011年、地震から7年ぶりに家族と再会した少女
- 映画『インポッシブル (映画)』 – 2012年、ユアン・マクレガー、ナオミ・ワッツなど。

外部リンク

- 外務省のスマトラ沖地震情報のページ (http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/asia/sumatra_tsunami.html)
- スマトラ島沖地震(ASEAN) (<http://www.aseannetwork.com/tsunami.html>)

「[https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=スマトラ島沖地震_\(2004年\)&oldid=59768267](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=スマトラ島沖地震_(2004年)&oldid=59768267)」から取得

カテゴリ: スマトラ島沖地震

-
- 最終更新 2016年5月18日 (水) 12:14 (日時は個人設定で未設定ならばUTC)。
 - テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。